

山内清男の方法論

—山内論文の読み方—

大 村 裕

はじめに

筆者に与えられた発表テーマは、「山内清男の方法論」ということであるが、今回発表する内容には新しい発見というものはなく、過去に刊行した3点の拙著（大村 2008、2011、2014）で記載した内容の概略に、若干の解説を加えたものである。特にここでは、山内論文をどのように読めばよいのか、ということに重点を置いて解説する。色々批判はあるかと思われるが、先学の研究の解釈は種々あってよいはずであり、あくまでも筆者の問題意識からの分析であることをお断りしておきたい^(註1)。

1. 山内清男の「型式学」の特徴

1-1 山内清男の「土器型式」のルーツ

山内の「土器型式」の概念はどのようなルーツを持つものであろうか？ 多くの考古学研究者はオスカル・モンテリウスの影響を指摘しているが、筆者は別の見解を持っている。山内の「土器型式」のルーツは、実はエドワード・S・モースにまでその淵源がたどれるのである。モースの大森貝塚発掘報告書（1879年）（岩波文庫版）の「序文」に次のようなことが書かれている。

「例をあげると、山形県でも東京の他の貝塚でも、大森貝塚の土器と非常によく似た形の土器が見いだされる」（11頁）

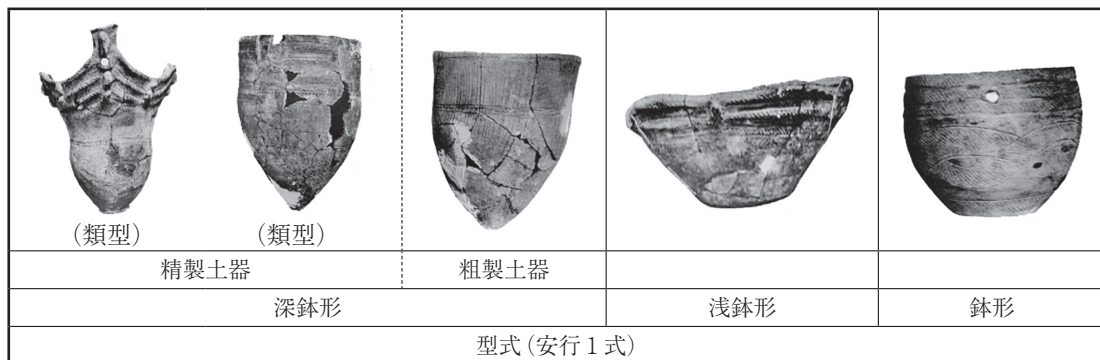
すなわちモースは、日本列島各地に大森貝塚出土土器と似た顔つきのものがあるとし、石器時代土器の類別の可能性を示唆しているのである。これを受けて八木柴三郎と下村三四吉は、茨城県椎塚貝塚出土土器が大森貝塚出土土器に似ているというので「大森風あるいは大森式」、千葉県阿玉台貝塚出土土器が茨城県陸平貝塚出土土器に似ているというので、「陸平風あるいは陸平式」と呼称している（八木・下村 1894：280頁）。なお八木・下村は、大森式と陸平式の間には貝塚を構成する貝種の様相から年代差があると主張している。すなわち前者が古く、後者が新しいとしているのである（八木・下村同上：282頁）。この所見は、現在の認識から言えば逆の位置づけであるが、山内清男は八木・下村によるこの研究を高く評価しており、「この土器区分は当時の学問の進展を物語るものであり将来の大成が期待された次第であった」としている（山内 1970→1972：218頁）。ちなみにこの時代には、大森式や陸平式の他に、神奈川県の諸磯貝塚出土土器（諸磯式）や茨城県の浮島貝塚出土土器（浮島式）、ならびに青森県の亀ヶ岡遺跡出土土器（亀ヶ岡式）が既に注目されている。

大正時代になると、山内清男の恩師鳥居龍蔵によって、大森式は「薄手式（派）」、陸平式は「厚手式（派）」、「亀ヶ岡式」は「出奥式（派）」と改称された（鳥居 1920など）。そして鳥居は、これらの顔付きの違いは年代差ではなく部族の差であると主張する。一方、ほぼ同じ時期に、東北帝大の古生物学・地質学担当の松本彦七郎は、宮城県里浜貝塚や宝ヶ峰遺跡たからがみねを層位的に発掘し、厚手式が下の層から出土し、薄手式が上の層から出土する

ことを証明して、「厚手式」と「薄手式」は部族の差ではなく、年代差であることを主張している（松本 1919a；1919b）。鳥居の弟子だった山内清男や甲野勇・八幡一郎は、この仕事に強烈な刺激を受けて、千葉市加曾利貝塚において上記両先学の主張の当否を検証する試みをするようになる。すなわち、加曾利貝塚の「E 地点」と仮称したところからは厚手式が出土、「B 地点」と仮称したところからは薄手式が出土した。そこで彼らは B 地点の薄手式を出土する貝層の下の土層を掘り進めたところ、厚手式が出土し、松本彦七郎の主張の正しさを追認したのであった（山内 1928→1967：98頁；甲野 1953：101～102頁）。それからは、山内清男らが関東・東北各地の遺跡を発掘してまわり、今まで「諸磯式」や「厚手式」・「薄手式」および「亀ヶ岡式」に分類されていた土器型式から数多くの細別型式を抽出して行く。このように、山内清男の縄紋土器型式編年は、明治以来の先学による研究成果の上に立って作られたものなのである。

1-2 山内清男の「型式」概念

次に山内清男の「型式」概念の実際を検討してみる。言うまでもなく、山内清男はゲーウィンおよびチャイルドやモンテリウスなどの西欧の学問をしっかりと勉強していたのは事実である。しかし、それを日本先史考古学研究に適用するにあたっては、「直輸入」することはせず、明治時代以来の諸先学の研究成果を十分に踏まえていたのである。例えば、モンテリウスの Typus（テュープス）の概念を山内は直接継承していない。濱田耕作は「Typus」を「型式」と訳してしまっているが、モンテリウスの『考古学研究法』（DIE METHODE）（モンテリウス 1903→濱田訳 1932）に提示された土器の図を見ると、一つの器種（この場合、イタリアの骨壺）を分類して「Typus」の「組列」（Typen-Serie テューベン・ゼーリエ）を作っているのである（103～109頁）。縄紋式の研究者はこうした分類単位を「類型」と呼んでいる。筆者が持っている独和辞典でも、「Typus」は、「型」「類型」「タイプ」とある。英語の「type」は、筆者が持っている『グランドコンサイス英和辞典』によると、「型・タイプ・種類・類型」となっている。ちなみに中国では「typology」を「類型学」と訳しているようである（大貫 1997：110頁）。要するにモンテリウスの「Typus」（一つの器種を類型区分）と、複数の器種・類型を包摂する山内の「型式」（第1図）とは異なるものであったのである。



第1図 山内清男の「土器型式」の構造（『日本先史土器図譜 第Ⅶ輯』及び山内1969aに基づき筆者構成）

どうしてこのように異なる概念に、同じ用語（「型式」）が用いられるようになったのであろうか？ そもそも「Typus」を濱田耕作が「型式」と訳してしまったことに問題があったのである。実は、濱田が「Typus」（英語表記では「type」）を「型式」と翻訳する（1922年）数年前、長谷部言人や松本彦七郎がモンテリウスの「Typus」とは別の概念で「型式」という用語を既に使用しているのに、濱田がこれに対して配慮しなかったことに問題があるのである。詳細は省くが、長谷部・松本は理系研究者（とりわけ松本は古生物学者）である。それで彼らは土器の区分を生物分類学に準じて行なっていたらしいのである。長谷部は、東京都文京区弥生町から出土した土器を

「標準弥生式」と言い（長谷部 1919a →1927：452頁）、松本は、大木式は宮城県大木貝塚から出土した土器を「模式」とすると言っている（松本 1919c：40頁）。これは八木・下村以来の伝統を踏襲したもの（似た顔つきの土器を「〇〇式」とする）であるが、さらに彼らは生物分類学の概念を踏まえているのではないかと筆者は推察している。生物分類学では「新種」の設定に用いた標本を「type」というのだそうである。これは日本語で「基準標本」や「模式標本」と翻訳されている（大橋広好訳『国際植物命名規約』1988年）。上述の長谷部・松本の「標準」あるいは「模式」は、ここから来ていると筆者は推定している。すなわち「標準弥生式」とは、東京都文京区弥生町出土の土器（基準標本）およびこれに相当する他遺跡の土器を指し、「大木式」とは宮城県大木貝塚出土土器（模式標本）およびこれに相当する他遺跡出土土器を指すというわけである。かれらの論文が出たのは1919年、そして濱田耕作が『通論考古学』^{だいとうかく}（大鑑閣）でモンテリウスの「Typus」（ただしここでは「Typus」を「type」と英語表記）を「型式」と訳したのは1922年である（濱田 1922：146頁）。濱田の著書の方が3年遅いのであるから、濱田は概念の異なる分類の単位に「型式」という訳語を与えるのは遠慮し、「類型」というような訳語を与えるべきであったと筆者は考えているのである。ちなみに、山内の「型式」は長谷部・松本の概念に従っていると思われる。『日本先史土器図譜解説』において、

「関山式は（中略）関山貝塚の土器を標準として名付けられて居る。」（山内 1939b →1967：7頁。傍点は引用者）
 「堀之内式は（中略）下総国東葛郡国分村堀之内貝塚（現在市川市）の土器を模式として、大正十三年自分が指摘したものである。」（山内 1940 →1967：16頁。傍点は引用者）

というように、「標準」とか「模式」とかいう語句を盛んに用いているのは、長谷部・松本の「型式」概念を踏襲しているためであると筆者は推定している（大村 2014参照のこと）。

1-3 生物分類学の知識を応用

次に、1924（大正13）年以降わずか十数年の間に山内清男が日本列島全土にわたる縄紋土器型式網の構築が出来た背景を解説する。その第1は、あとで説明するように、宮城県大木貝塚や岩手県大洞貝塚の層位的発掘を基準にして、全国の縄紋土器を眺めていたことである。大洞貝塚の発掘データは公表されていないのははっきりしないが、大木貝塚の場合、3m～5mもある包含層を精密に発掘したデータが、山内によって不十分ながら記載されている（山内 1929）。この層位事例を基準にして関東～西日本の縄紋前期～中期の土器を整理出来たのである。晩期は大洞貝塚の各地点で確認した細別型式を基準にしたものと推定される。これに、土器胎土中の繊維や底部の形態、および磨消縄紋などの存在も各地の縄紋土器型式の並行関係を推定するのに役立てているのは周知の通りである。

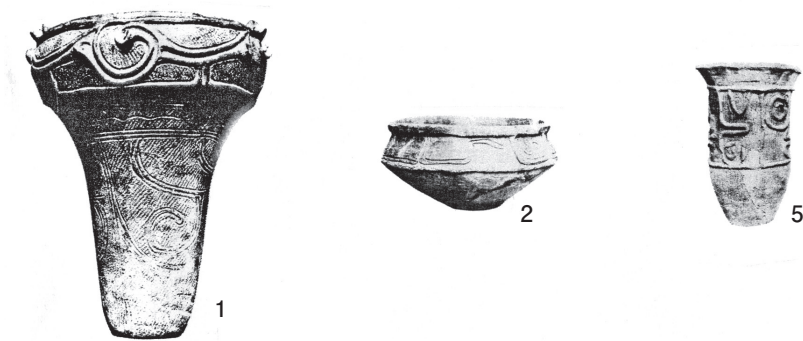
その第2は、こうした考古学的視点（層位的根拠・型式要素）だけではなく、山内清男が生物分類学の基礎教養を十分に持っていたからだと筆者は推定している。東京帝大選科在学中も遺伝学に相当入れこんでいたという証言を佐原眞がしているし（佐原 1984：236頁）、東北帝大在職中には、解剖学教室の人たちよりも生物学のほうの人たちと親しく付き合っていたという証言がある（伊東・工藤 1984：490頁）。ちなみに筆者は1999年頃、生物分類学のテキスト（馬渡 1994）の中から、山内清男の方法論に酷似するセオリーを発見したことがあった。馬渡峻輔によれば、生物の分類群を体系化する前提は、

- a. 「単位は互いに等価であること」、b. 「その単位は離散（引用者註：中間がなく、他とはっきり区別される）的であること」、c. 「体系を作る基準・尺度はただ一つであること」

というのである。これは山内清男の縄紋土器分類の方針と全く一致しているのである。すなわち山内による縄紋土器分類の方針は以下の通りである。

- i. 「土器型式」の年代幅を等価に見立てている。すなわち、「各期（引用者註：縄紋土器型式の大別のこと）の平均年数約400年、各型式は約40年余」と捉えている（山内 1968：82頁）。
- ii. 折衷的要素を持つ土器は標準資料から除外する（離散的特徴をもった土器のみに標準をあてる。他型式と境界がはっきりしない土器は当面ペンディングにする）
- iii. 土器分類の単位は「型式」ただ一つ（基準は「似ているか」「似ていないか」（説明の便法として器種・精粗・類型の用語を使うことはある）。

上記「i」に対しては、大規模発掘によって縄紋土器が各地から膨大に出土しており、炭素14年代測定法も普及している今日、多くの批判があると思われるが、明快に分類体系を整えるためには必要な手続きとすることが出来ると思われる。「ii」の「折衷的要素を持つ土器は標準資料から除外する」という部分は、『日本先史土器図譜』を参照すると理解しやすい。山内は資料選択において、他の型式の要素が入っている土器を排除しているのである。例えば「加曾利E式の古い部分」の選択にあたっては、杉原荘介が千葉県市川市姥山貝塚で発掘した一括土器群（杉原 1940）のうちの2点（第2図2・5）は収載されているが、最も優品と評価出来るキャリパー形深鉢は収載されていない（第2図1）。なぜだろうか？ 写真をよく見てみると、口辺部の装飾は加曾利E式の古い部分であるが、体部は東北南部に分布の中心を置く大木8式の装飾なのである。すなわち、異なる型式の特徴を持つ折衷土器なのである。このような折衷土器を模式標本に入れてしまうと、他型式との区別が截然と出来なくなる。あくまで他とはっきり区別出来る存在（離散的存在）に焦点を当てて山内清男は土器型式の区分をしているのである。



第2図 杉原荘介姥山貝塚発掘資料（杉原 1940）（抜粋）

『日本先史土器図譜 第Ⅸ輯』に収載されたのは No2 と No5。No1 は採用されていない

「iii」については、＜複雑な「縄文土器」を解明するには「型式」の概念一つでは不十分＞として、「型式・様式・形式」という概念を導入しようという意見もある（小林 1977：168頁）が、分類単位に種々の区別をあらかじめ用意すると、それらを体系化する際にかえって整理が難しくなってしまうという危険性があるように思われる。結果的に基準は一つ（「似ているか」「似ていないか」）にしておいたことにより、短期間に編年体系が整備できたのではないかと筆者は推定している。

以上、説明を少し端折った部分もあるが、複雑な装飾を持つ縄紋土器をある程度単純明快に分類・体系化出来たのは、生物分類学の素養が脳中に刷り込まれていたからだと筆者は推定しているのである。

1-4 自然（形質）人類学上の仮説（「変形説」）の採用

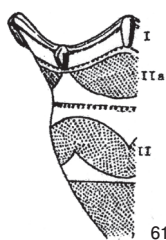
こうした山内清男独自の分類体系が戦中・戦後において急速に普及したのは、先述したように日本先史考古学史を巧みに取り込んでいたことが大きな理由であるが、長谷部言人の自然人類学上の仮説（「変形説」）の台頭が背景にあると筆者は考えている^{（註2）}。「変形説」というのは、石器時代人の骨の形態が現世日本人のそれと大きく異

なっているのは、民族が異なるわけではなく、文化や食生活が変化したことによるとするものである。この観点から長谷部は石器時代人も弥生時代人も古墳時代人も歴史時代人も同一系統の民族（「日本人一系説」）であるとしたのであった。長谷部はこの持説を権力の上層部（企画院）にも一般国民にも説いて回ったのである（大村 2008：51～52頁）。この「日本人一系説」が定説化していなければ、山内の縄紋土器型式編年の構築はありえなかったのである。鳥居龍蔵が主張するように、石器時代人がアイヌで、弥生時代人が固有日本人で現生日本人の直接の祖先だとすると、「石器時代」（アイヌ文化）が平安・鎌倉時代まで東北地方に残存しても一向におかしくないわけである。また「厚手式」と「薄手式」の相違が年代差ではなく「部族の違い」だとすると、山内が推進した縄紋土器型式の編年（土器型式に新旧の序列があるとする前提に立つ）は成り立たなくなる。鳥居龍蔵が構築したパラダイム（石器時代人＝アイヌ、土器型式の違いは部族の違い、弥生人＝固有日本人）に染まった戦前の学界^{（註3）}や日本国民に向かって、山内の主張を浸透させるためには、長谷部による自然人類学上の仮説が学界・世間に浸透することが不可欠であったのである。

以上をまとめると、山内土器型式学は①欧米の考古学の成果を参照しつつ、日本先史考古学史を踏まえて構築したものであること、②その大きな特徴は、仮説（日本人一系説）、分類（縄紋土器型式の抽出）、体系化（日本列島全土における縄紋土器型式の編年）が一体化したものであり、それらの一部をあげつらって批判することは妥当ではないということである。

2. 山内清男による「文様」と「縄紋」の定義

筆者が学生時代、『山内清男・先史考古学論文集・新第四集』（1972年）所載の「文様帯系統論」を読んでいて奇異に感じたのは、「挿図 No. 61」に付された文様帯記号の不思議であった（**第3図**）。この土器は縄紋後期中葉の土器であるが、口辺部には「I」という記号が付き、頸部のところには「II a」、体部には「II」という記号が付いている。一方、底辺部の縄紋部には文様帯の記号が付いていない。これはなぜだろう？ という疑問が湧いたのである。その後長い間この疑問を解決できなかったのであるが、1994年のある日、この論文の冒頭にある、次のような文章がふと脳裏に浮かんだのであった。



第3図 「文様」と「縄紋」の違い
山内 1964より転載

「土器の研究は形態学 Morphology に比すべき部分を持っている。いわゆる型式学 Typology は最もよく比較解剖学に比較し得るであろう。（中略）ここに述べる文様帯系統論も資料、観察の主眼、理論の建てかたにおいて同じ方向を指すものである。」（174頁。ゴシックへの改変は引用者）

すなわち、文様帯系統論は文様の「形態」に焦点を当てて立論されていたのである。その目で見ると、「挿図61」の「I」の部分は隆線と瘤状突起で文様が構成されている。「II a」は縄紋であるが、弧状の形態に磨消されているので、前後型式との比較が出来る。同様に「II」とある部分も縄紋ではあるが、入り組み状の「形態」を持っているのである。一方、底辺部の縄紋部は上縁こそ区画線が入れているが、底部付近には区画はなく、「形態」を持たない。これでは他型式とのつながりを確認出来ないで、文様帯の分析からは外しているのである。文様に糸偏を付けないのは、単なる点列である「縄紋」と区別する意図があったのかもしれないと筆者は推定したのであった^{（註4）}。このことが後学にはなかなか理解されておらず、山内の弟子筋にあたる著名な研究者も「縄紋」を「文様」の一つと位置付けてしまっている次第である。い

くつか具体例を挙げると、芹沢長介は、「文様としては縄紋がみとめられるものに限定した。」(芹沢 1957 : 45頁。傍点は引用者)と書いており、「縄紋」も「文様」として捉えているのである。また小林達雄も、撚糸紋系土器群の分析において、縄紋が器面全体に施された個体について、「胴部」の縄紋を「第Ⅰ文様帯」とし、頸部の縄紋を「第Ⅱ文様帯」、口唇部の縄紋を「第Ⅲ文様帯」と呼称して記載を進めているのである(小林 1966 : 43頁)。更には江坂輝彌も「縄文文様は紋ではなく文様であるから文が正しい」(『考古学ジャーナル』No.100 1974年)と考えていたようである(23頁)^(註5)。

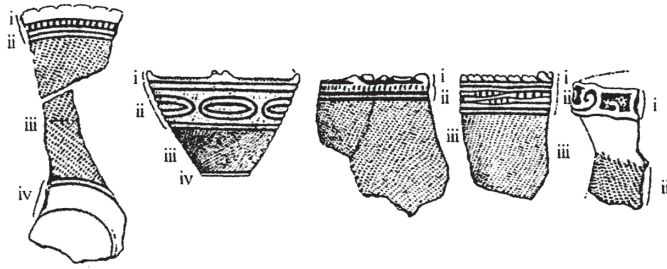
もちろん、「縄紋」も「文様」の一つと理解する立場は当然あってよいと思う。「文様帯系統論」も山内清男が本邦各地の縄紋土器の系統を整理するために考案した独自のツールであり、その「理論」の正しさが検証されているわけでもない。ただ、山内に極めて近い研究者でも彼の真意を理解していなかったと言いたいのである。ちなみに「ある型式の文様帯は前代土器型式の文様帯と連続、継承関係を持っており、次代型式の文様帯の基礎となる。土器は土器から、文様帯は文様帯から、系統は要約して次のごとくたどり得るだろう。」(山内 1964→1972 : 176頁)という基本的視点は、筆者も東関東五領ヶ台式から阿玉台式への変遷の分析において非常に有効なものであることを確認している(大村 2008 : 126 ~ 151頁)。頭ごなしに山内の「文様帯系統論」を批判したり無視したりするのではなく、今後も丁寧に検討して行く必要があるように思われる。

3. 山内清男の「文様帯系統論」の由来

一つ謎が解けると、次々に学生時代には分からなかった疑問が解けて行く。次なる謎は、山内清男による「Ⅰ. 文様帯」と「Ⅱ. 文様帯」の定義である(山内 1964→1972)。草創期の土器にも文様帯があるので、何故それらを「Ⅰ. 文様帯」とせず「古文様帯」としたのか。山内は何の説明もしてくれていない。それで例によって山内論文の図を検討することによって理解しようと試みた次第である。次頁の**第4図**と**第5図**を見て欲しい。**第4図**は松本彦七郎の「宮戸嶋里濱及気仙郡瀬澤介塚の土器 附特に土器紋様論(二)」(『現代之科学』7巻6号)に唯一掲げられた図の抜粋で、その右端は中期後半の大木8式である。小文字のローマ数字の「i」が右端の大木式の口辺部に付けられており、体部には小文字の「ii」が付けられている。iは「凸線紋曲線模様部」、iiは「凹線紋曲線模様乃至第一次直線模様部」とあるので、iは隆線文様部、iiは沈線文様部ないしは沈線による直線模様部と位置付けていると推定される^(註6)。一方、山内清男の「文様帯系統論」に掲げられた挿図(本稿第5図50(左)と51(右))を見てみると、隆線文様の部分にローマ数字の大文字「Ⅰ」が与えられており、体部の沈線文様の部分にローマ数字の大文字「Ⅱ」が与えられているのである。**第4図**右端と**第5図**左を比べてみて頂きたい。山内は松本の「土器紋様論」を参考にしていただけ考えられないのである。ただし、iiiの「一律縄紋部」、ivの「接底平滑部乃至第二次直線模様部」は「形態」を持っていないので、山内は採用していない。ちなみに以下の山内(1964→1972)に掲げられた文章に注意して頂きたい。

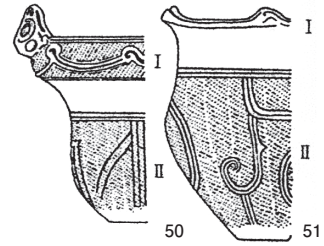
「Ⅰ. 文様帯」は「中期前半、前期、早期にまで達する。」(山内 1964→1972 : 176 ~ 177頁。下線は引用者)

すなわち、松本が設定した「凸線紋曲線模様部」(隆線による文様帯)を中期後半の大木8式から「中期前半、前期、早期」まで遡って行き、草創期後半(現在一般には「早期初頭」と言われている)で文様が一旦途絶したので、それに遡る草創期前半の文様帯を「古文様帯」としたことが分かったのである。



第4図 松本彦七郎の「模様」記号 (松本 1919c による)

註 原典は記号が不鮮明なため『論集 日本文化の起源 1』(平凡社 1971)に掲載された図を抜粋して複写した。なお、同書の図のキャプションは原典の723頁の説明を挿図の下に移しかえたものであるが、模様記号(i、ii、iii、iv、)に付いた「カンマ」が抜けている。山内はこの部分を「ピリオド」(I、II)に変えたわけで、学史的には外すべきではなかった。



第5図 山内清男の「I. 文様帯」と「II. 文様帯」(山内 1964より転載)

4. 山内清男の層位的調査法

次に山内清男の型式学的研究を支えた層位論的研究方法について触れる。

東洋考古学の権威であった梅原末治は、層位的発掘法は中東のテルのような遺跡にこそ適用されるべきで、日本の小規模な遺跡には用をなさないと京都大学の講義で語っていたそうである(穴沢味光 1994: 243~244頁)。確かに南関東地方の台地上だと、地表から数十cmでローム面に達してしまうので、出土遺物の新旧決定や土器型式の編年を層位的に確認することは困難な場合が多い。山内清男はどのようにしてこの困難を乗り越えたのであろうか? 結論を先に述べると、遺跡各地点の複数の層位を編集して多数の層位を積み上げて行くのである。实例を宮城県大木貝塚の発掘の事例で解説しよう。1929年に山内は「関東東北に於ける繊維土器」というやや長文の論文を発表する。図が写真一枚しかない論文で理解するのが厄介なのであるが、この中に、「繊維土器の層位と分布」という章がある。ここに各地の遺跡の層位事例が記載されているのであるが、その中にくだんの大木貝塚の事例が記載されている。その記載を表に整理したのが第1表である。

第1表 大木貝塚各地点遺物包含層対応表とその編集表

	B地点	C地点	D地点	E地点
①	所謂厚手式(「加曾利E」に並行)			
②	(D地点第1層、第2層出土土器の型式)		第1層 第2層 第3層	上層 中層
③		上層		
④		下層: 繊維	下方三層及びその間層: 繊維	下層: 繊維

B地点上層(「厚手式」)
D地点第1層
D地点第2層・E地点上層
D地点第3層・E地点中層
C地点上層
C~E地点下層(繊維土器)

※ B地点の内容は、大木貝塚の層位のまとめの部分で、山内が追加記載した(56頁)もの。
 ※ 網掛けの部分は各々同一の型式が出土したことを示す。

(大木貝塚各調査地点の層位の編集)

詳細を説明するゆとりはないが(是非拙著『縄紋土器の型式と層位』に当たって欲しい)、B地点からE地点の層位事例を結び合わせて、厚手式(加曾利E)並行から繊維土器(前期前半)までの間に4つの土器型式を層位的に区分しているのである(D地点第1層の型式、D地点第2層/E地点上層の型式、D地点第3層/E地点中層の型式、C地点上層出土の型式)。これらを縦に編集すると、第1表右のようになる。

上記の記載には具体的な型式名が書かれていないが、翌年(1930年)に公表された「斜行縄紋に関する二三の観察」(『史前学雑誌』2巻3号)に掲げられた関東・南東北の縄紋土器型式編年表(第2表)と対照すると、「所謂

厚手式（加曾利 E 並行）」と繊維土器（大木 1、2）の間に存在する 4 つの型式（大木 3、4、5、7 式）と数が一致するのである。この論文は、大木貝塚の発掘データ公開後のわずか一年後の公表なので、上記の新旧序列と大木諸型式とはおそらく一致するものと筆者は見ている。なお第 2 表中に「大木 6 式」が抜けていることに読者は気が付いたであろうか。実は 1929 年頃作成した未公表の「仮編年表」（中村五郎編『画竜点睛』巻頭図版 3）には、「大木 6 式」は「大木 7 式」と共に、関東の阿玉台式に並行するとあったのである（第 3 表）。

第 2 表 1930 年段階の山内による関東・陸前の縄紋土器型式編年表

関東地方	陸前
三戸式（縄紋以前） 子母口式（同）	槻木 1（縄紋以前）
茅山式 蓮田式	槻木 2 大木 1、2、室浜
諸磯式 阿玉台式	大木 3、4、5 大木 7
加曾利 E 式	大木 8

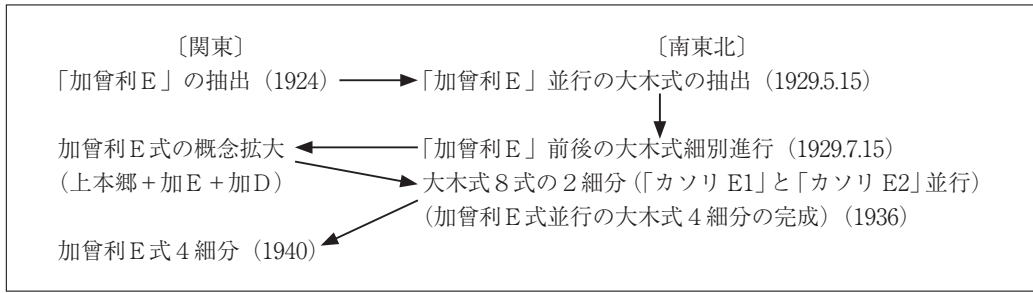
山内 1930b による（網掛けの部分と点線は引用者）

第 3 表 山内清男が伊東信雄に示した関東・東北地方の縄紋土器型式編年表
(1929 年頃作製)

関東	陸前	陸奥
オタマダイ	(ダイギ) 6	(ナカイカイツカ) II a
	7	b
カソリ E 1	○	
2	8	III a
3	9	b
	10 = 境 1	

中村五郎編 1996 の図版 3 から抜粋

ところが阿玉台式と大木諸型式を比較しなおしたところ、文様要素の類似から阿玉台式（「縄」を模した角押紋を施紋）は、大木 7 式（縄の側面を器面に押圧）のみに並行することに気が付いたので、「大木 6 式」は一時ペンディングになったようなのである。後年、阿玉台式と諸磯式の間には十三菩提式が存在することになった（1932 年）ので、大木 6 式は十三菩提式並行の土器型式として 1936 年に編年表に復活したのである。更に、南関東において、十三菩提式と阿玉台式および勝坂式の間には「五領台式」の存在が確認された（1936 年）ので、大木 7 式は「大木 7a 式」（五領ヶ台式並行）と「大木 7b 式」（阿玉台式並行）に区分されたのであった（大村 2008：179～181 頁）。こうした南東北編年と南関東編年の間の土器型式編年の「キャッチ・ボール」は加曾利 E1 式～同 4 式と大木 8 式～同 10 式の間でも認められる（次頁第 6 図参照）。すなわち、「関東北に於ける繊維土器」において大木貝塚 B 地点出土の「所謂厚手式」を「加曾利 E 並行」としたのは、南関東編年に拠るものである。その後、「加曾利 E」前後の大木式の型式学的分析が進み（山内 1940→1967：25 頁）、これを参照して南関東の中期後葉の土器群の整理が進むことになる（山内 1940→1967：25 頁）。本来、「加曾利 E」という符牒は、あくまでも加曾利貝塚 E 地点から出土した土器群に付けられたもので、磨消縄紋が発達する加曾利貝塚 D 地点の土器とは、区別されたものであった^(註 7)が、大木式の整理が進む中で「真の加曾利 E 地点の土器」（口縁部に突起殆ど無く、体部の文様には隆線がなく沈線のみ。縄紋は斜行するもののみ）と「加曾利 D 地点の土器」（隆線を輪郭する沈線が目立ってくる。磨消縄紋が発達）を併せて「加曾利 E 式」と総称されるようになったのである。この際、松戸市上本郷貝塚 F 地点 2 号



第6図 南関東編年と南東北編年の「キャッチボール」(大村 2008による)

竪穴の炉体土器(口縁部に突起あり。口頸部の隆線文様発達。縄紋は縦行)をこれらに加え、「カソリ E1」(上本郷 F 地点炉体土器)、「カソリ E2」(真の加曾利 E 地点の土器)、「カソリ E3」(加曾利 D 地点の土器)の細別が出来上がったのであった(第3表参照)。山内が加曾利 E 式土器について、「その間に意味は多少拡大されて、真に加曾利 E 地点発見の土器の範囲外のものにまで及び、更に若干の細別型式に分かたれるようになって居る。」(山内同上)と解説したのは、上記の経過を指しているものと推定される(大村 2008: 178~181頁)。一方、第3表にある「ダイギ 8」の上にある「○」の部分には、南関東で設定された「加曾利 E1 式」に対応させる形で「大木 8a 式」を補填し、本来の「大木 8 式」を「大木 8b 式」としたと推定されるのである(大村、同上: 181~183頁)。

以上、山内清男の層位的研究は、遺跡各地点の層位の「編集」と、隣接地域の編年との対応関係を交叉させることによってその効率を高めて行ったのであった。

5. 縄紋土器の遡源を追う研究手法

最後に山内清男による最古の縄紋土器の探求の方法について説明する。山内は最古の縄紋式の文物を突き止め、これと大陸の類似文物を見つめることによって縄紋人(日本民族の祖先)の故地を突き止めることを企図していた(山内 1969b: 16頁)。その研究の一端を早くも戦前公表した『日本遠古之文化』(1939年自費出版)の「II 縄紋土器の起源」において叙述している。例によって図は写真 2 枚しかないで、初心者には理解が難しいのであるが、ここの記載を表に整理すると、見事な型式連鎖を確認出来る。すなわち、山内が学界デビューする頃、最古の縄紋土器と考えられていた「諸磯式」から、山内清男が1932年段階で「最古」と考えた「三戸式」までの各型式要素(繊維混入の有無、貝殻条痕の有無、底部の形態、縄紋の有無、文様帯の特徴)の記載について表にまとめてみると、各型式要素が見事に鎖の輪のようにつながっていることを確認出来るのである(第4表)。この表について

第4表 『日本遠古之文化』記載の「古式縄紋土器」型式群における諸要素のつながり(大村 2008による)

型式要素 型式名	①繊維混入	②貝殻条痕	③底部形態	④縄紋	⑤文様帯の特徴
三戸・田戸下層	×	△	尖底	×	幅広い
田戸上層/子母口	△	△	丸底	—/(×)	幅広く口頸部に収まるもの多し
芽山式	◎	◎	丸底・平底 並存	(△)	口頸部の狭い部分にあること多し
「総称蓮田式」	◎	×	平底	◎	口頸部に限られる
狭義の諸磯式	×	×	平底	(◎)(a式) (△)(b式) (—)(c式)	同上。(新しい型式で再び文様の幅が広がる)

注 () の部分は『日本遠古之文化』の記述にはないが、『日本先史土器図譜』中の記述で確認できたもの。「—」は該当の的確な記述が確認できないもの。◎は「顕著」、△は「少」、×は「無又は稀」の記述を記号化したもの。

少しだけ説明すると、例えば①の「繊維混入」は、この「古式縄紋土器群」の中で一番新しい「狭義の諸磯式」には無く、その上の階段^(註8)の「総称蓮田式」には大量に混入している。この繊維混入の事実からその上の階段の茅山式との連続を確認する。更にその上の階段の「田戸上層／子母口」では、量が減少しているものの、繊維の混入が確認出来るので、茅山式との連続をたどれるのである。それが、「三戸・田戸下層」では全く存在しなくなり、所謂繊維土器（「総称蓮田式」や茅山式）から遠く離れた存在であることを推定しているのである。ただし、繊維が混入していないとなると、一番新しい「狭義の諸磯式」との関係が問題になってしまう。その点については、②の貝殻条痕の存在や③の底部形態の連続から、「田戸上層／子母口」との連続が確認出来るというわけである。実は、三戸式と田戸式の層位関係、茅山式と「総称蓮田式」、「総称蓮田式」と「狭義の諸磯式」の層位関係について、山内清男は自らの手で確認出来ていない。「繊維土器について 追加第三」という追加論文において、「しかしこれ（大村註：古式縄紋土器群の年代序列）は単なる想像で、各型式の内容はより闡明され、年代関係が確定的となるまでは、当否は不明である」（山内 1930a → 1967：82頁。傍点は引用者）と正直に書いている。この見通しは山内清男の高弟であった芹沢長介によって、戦後神奈川県夏島貝塚などの精密な層位的発掘において正しさが確認されているが（芹沢 1957など）、芹沢はこの事実確認によって、山内に対する尊敬の念をますます深めたことであろう。

おわりに

以上、筆者が山内博士の諸論文を読み込んで理解できた事実の一部を紹介した。山内博士が亡くなって今年で51年目になる。この間、全国の大規模発掘によって新資料が続出し、山内博士の研究成果の一部は修正を余儀なくされている。これは学問の発展にとって避けて通ることが出来ないことである。ただ、筆者は再三主張して来たのであるが、学史の研究は諸先学が遺した研究結果を学ぶだけでは不十分で、それを導き出した方法論を学ぶことにこそより価値があると思っている。新資料の発見でそれまでの定説が否定されることは考古学では珍しくはない。しかし先学が実践した方法論はなかなか劣化しないのである。ちなみに山内博士は自己の方法論を丁寧に説明してきていない。山内博士の業績を学ぶにあたっては、文字の部分だけでなく図や表の分析が大事である。そして検討対象の論文だけでなく、それに関連する草稿・評伝・書評など様々な資料を突き合わせると思わぬ発見をすることがある。

この度、山内博士の草稿類が膨大な写真類と共に早稲田大学の会津弥一記念館に寄贈されたという。それらは長い間公的機関に正式に保管されておらず、閲覧も引用もできなかった時代が続いたが、ようやく安住の場所を得たわけである。今後、それらを若い世代の研究者が自由に閲覧する環境が整い、「山内考古学」の研究成果が陸続と生まれることを念願してやまない。

追記

この度のシンポジウムの予稿集に、山内清男による「縄紋」施紋手法の発見について、芹沢長介により疑義が出されたことに関する論議が岡本東三氏によって紹介されている。この問題について筆者は、当日の「総合討論」で種々発言する心算であったが、時間の関係で言及することが出来なかった。それで、大事な事実だけここに追記しておく。

芹沢長介は、山内清男による「縄紋」施紋手法の発見は、W・E ニコルソンによる北部ナイジェリアの民族事例の報告（1929年）を参考にしたのではないかとの疑義を提示していた（芹沢 1975；1980）。確かに山内はその存在を知ってはいたが（ほぼ確実な証拠あり）、自身による斜行縄紋の施紋手法解明の先行研究とは見做していなかつ

たと推察される。それはどういうことかという、ニコルソン報告の Fig. 1 (45頁) にレイアウトされた10点の土製品のうち、「I」とナンバーが付けられた壺の頸部直下に縄の回転圧痕と推定される模様が描かれているが、それは横位に延びる5～6本の点線で、斜行縄紋のスケッチではない。ニコルソンは縄による回転押捺とその圧痕の原理を理解していなかったのである。ちなみに山内は自分の研究と他者の研究の異同を厳密に区別する研究者であった。恩師の鳥居龍蔵や尊敬してやまない松本彦七郎の業績に対してもその姿勢を堅持している。例えば山内による「文様帯系統論」は、上述したように松本による「土器紋様論」に着想を得たものであるが、その適用において大きな違いがあるので直接引用していない。ニコルソン報告（縄の回転とその圧痕の原理に気づいていない）についても、自らの発見（縄を回転させると斜行縄紋が出来る）とは異なったものと判断し、あえて引用しなかったのではないかと推定されるのである（詳細は近刊の大村2022を参照されたい）。

註

- (1) 筆者の場合は、眼前にある考古学の課題を解決するための「鍵」を得ることを目的として山内清男の研究を勉強している。
- (2) 長谷部の「変形説」の萌芽は大正時代に認めることが出来る（例えば長谷部 1919b →1927）。これを明快に論じたものには長谷部（1949→1973：126頁）がある。
- (3) 雑誌『ミネルヴァ』創刊号に掲載された「座談会 日本石器時代文化の源流と下限を語る」（江上ほか 1936）において、戦後日本考古学界の「大御所」となる後藤守一が、＜関東・東北の石器文化は鎌倉時代に下るという喜田貞吉の主張は必ずしも無茶の議論ではない＞と主張している（36頁）。この時代は、記紀の記載と整合性のある鳥居龍蔵のパラダイムが支配的であったのである。
- (4) 山内考古学を学ぶ研究者にも「文様」を「紋様」と表記する人がいるが、山内清男の高弟・佐藤達夫の指導や『日本先史土器の縄紋』（先史考古学会 1979年）の表記に従っていると推定される。山内清男の学位請求論文は、佐藤達夫のもとで清書されており（印刷・刊行に携わった塚田光の「山内論文進行日誌」によれば、早稲田大学国文科の学生が実際に清書したという）、このとき「もん／文」にはすべて糸偏を付ける方針がとられたと推定される（「縄文」と書かなければならない部分も「縄紋」と記載され、文意が通らない箇所がある（山内 1979：4頁11行目））。塚田が山内清子夫人の了解をとって公開した（塚田 1980：100頁）山内清男の草稿には、「文様」と記載された箇所を確認出来る（塚田 1980：第1図1の草稿写真の左から4行目）。ちなみに山内の主要な論文を検討すると、「もんよう」の表記には揺らぎ（「紋」を使っている箇所がある。ただし少数）があるが、「もんようたい」は100パーセント「文様帯」となっている（大村 2008：100～103頁）。
- (5) この部分は明治の元勳神田孝平の意図を説明したような書きぶりになっているが、原典（神田 1888）にはそのような記述（縄紋は文様であるから「文」が正しいというような記述）は認められない。江坂の考えを反映したものと推察される。
- (6) 松本の図には体部に存在する筈の沈線が表現されていないが、「ii」は「凹線紋曲線模様」と位置づけられているので、本来沈線文様が描かれていなければならない。
- (7) 「加曾利貝塚D地点も略類似の土器を出すのであるが、精査してみると多少異った点があり、特に磨消縄紋の手法が加曾利Eの土器には無く、Dのものにあることが判明した」とある（山内 1940→1967：25頁）。
- (8) 「階段」という用語は近年あまり用いられていないが、山内清男が細別型式を指示する用語としてさかんに使用しているものである。生物学者の丘浅次郎や古生物学者の松本彦七郎の用法に従っているものと推定される（大村2014：57頁）。筆者はこれに従っている。

引用・参考文献

- 穴沢味光 1994 「梅原末治論」『考古学京都学派』雄山閣
- 伊東信雄・工藤雅樹 1984 「伊東信雄先生に聞く一私の考古学史—」『宮城の研究 1巻 考古学編』清文堂出版
- 江上波夫・後藤守一・山内清男・八幡一郎・甲野勇 1936 「座談会 日本石器時代文化の源流と下限を語る」『ミネルヴァ』創刊号
- 江坂輝彌 1974 「縄文時代 学史展望」『考古学ジャーナル』No.100

- 大橋広好 訳 1992 『国際植物命名規約 1988』津村研究所
- 大貫静夫 1997 「中国における土器型式の研究史」『考古学雑誌』82巻4号 日本考古学会
- 大村 裕 2008 『日本先史考古学史の基礎研究—山内清男の学問とその周辺の人々—』六一書房
- 大村 裕 2011 『縄文土器の型式と層位—その批判的検討—』六一書房
- 大村 裕 2014 『日本先史考古学史講義—考古学者たちの人と学問—』六一書房
- 大村 裕 2022 『続 日本先史考古学史の基礎研究—山内清男の学問とその周辺の人々—』六一書房（印刷中）
- 神田孝平（淡厓） 1888 「史前器所蔵之原由」『東京人類学雑誌』34号
- 甲野 勇 1953 『縄文土器のはなし』世界社
- 小林達雄 1966 「縄文早期前半に関する問題」『多摩ニュータウン遺跡調査報告 II』多摩ニュータウン調査会
- 小林達雄 1977 「型式、様式、形式」『日本原始美術大系 1 縄文土器』講談社
- 佐原 眞 1984 「山内清男論」『縄文文化の研究 10』雄山閣
- 杉原莊介 1940 「下総姥山に於ける私の採集品」『考古学』11巻6号 東京考古学会
- 芹沢長介 1957 「五 出土した遺物（一）土器」『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』明治大学
- 芹沢長介 1975 『陶磁大系 第一巻 縄文』平凡社
- 芹沢長介 1980 「新刊紹介 山内清男著『日本先史土器の縄文』」『考古学雑誌』66巻1号
- 塚田 光 1980 「書評 山内清男著『日本先史土器の縄文』の新刊紹介を読んで」『考古学雑誌』66巻3号 日本考古学会
- 鳥居龍蔵 1920 「武蔵野の有史以前」→1975『鳥居龍蔵全集』2巻 朝日新聞社
- 中村五郎 編 1996 『画竜点睛』山内先生没後25年記念論集刊行会
- 長谷部言人 1919a 「宮戸島里濱貝塚の土器に就いて」『現代之科学』7巻3号→1927『先史学研究』大岡山書店
- 長谷部言人 1919b 「石器時代住民と現代日本人」『歴史と地理』3巻2号→1927『先史学研究』大岡山書店
- 長谷部言人 1949 「日本民族の成立」『新日本史講座 一. 原始時代・古代前期』中央公論社→1973 池田次郎・大野晋 編 『論集 日本文化の起源 5』平凡社 収録
- 濱田耕作 1922 『通論考古学』大鏡閣
- 松本彦七郎 1919a 「陸前国寶ヶ峰遺蹟の分層的発掘成績」『人類学雑誌』34巻5号
- 松本彦七郎 1919b 「宮戸島里濱介塚の分層的発掘成績」『人類学雑誌』34巻9号
- 松本彦七郎 1919c 「宮戸島里濱及気仙郡瀬澤介塚の土器 爾特に土器紋様論（二）」『現代之科学』7巻6号
- 馬渡峻輔 1994 『動物分類学の論理』東京大学出版会
- モース, E. S. 1879 Shell Mounds of Omori. →1983 近藤義郎・佐原眞訳『大森貝塚』（岩波文庫）
- モンテリウス, O. 1903 DIE METHODE. →1932 濱田耕作訳『考古学研究法』岡書院
- 八木奘三郎・下村三四吉 1894 「下総国香取郡阿玉台貝塚探究報告」『東京人類学会雑誌』97号
- 山内清男 1928 「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』43巻10号→1967『山内清男・先史考古学論文集 第二冊』先史考古学会
- 山内清男 1929 「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』1巻2号→1967 同上
- 山内清男 1930a 「繊維土器について 追加第三」『史前学雑誌』2巻3号→1967 同上
- 山内清男 1930b 「斜行縄文に関する二三の観察」『史前学雑誌』2巻3号→1967『山内清男・先史考古学論文集 第五冊』先史考古学会
- 山内清男 1939a 『日本遠古之文化』先史考古学会→1967『山内清男・先史考古学論文集・第一冊』先史考古学会
- 山内清男 1939b～1940『日本先史土器図譜 第一部・関東地方・第二輯・第六輯・第七輯・第八輯』→1967『山内清男・先史考古学論文集・第六冊～第十冊』先史考古学会
- 山内清男 1964 「縄文式土器・総論」『日本原始美術 1』講談社→1972『山内清男・先史考古学論文集・新第四集』先史考古学会
- 山内清男 1968 「矢柄研磨器について」『日本民族と南方文化』平凡社
- 山内清男 1969a 「縄文時代研究の現段階」『日本と世界の歴史 第1巻 古代（日本）先史—5世紀』学習研究社
- 山内清男 1969b 「縄文草創期の諸問題」『MUSEUM』224号 東京国立博物館
- 山内清男 1970 「鳥居博士と明治考古学秘史」『鳥居龍蔵記念博物館紀要』4号→1972『山内清男・先史考古学論文集・新第五集』先史考古学会
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄文』先史考古学会